



第1章

序論

梶 茂樹

1. はじめに

この序論は、まず本書全体の構成を述べ、次に本書を読むにあたって、知っておいた方がいいアフリカの言語の特色を述べる。そしてアフリカ諸語の声調・アクセントの特徴を解説し、最後に各論文に描かれた言語の特徴について述べる。

2. 論文の配列

本書に掲載された論文は全部で13編あるが、その地理的分布は地図1のようである。多くは、いわゆるバンツー (Bantu) 系の言語である。バンツー系というのは後で述べるニジェール・コンゴ (Niger-Congo) 語族ベヌエ・コンゴ (Benue-Congo) 語派の低位分類の一部である。それ以外はバンバラ語、アカン語、ジュバ・アラビア語、およびウォライタ語の4言語である。バンバラ語、アカン語はニジェール・コンゴ語族には属するが、それぞれマンデ (Mande) 語派、クワ (Kwa) 語派であり、ベヌエ・コンゴ語派のバンツー系とは異なる。ジュバ・アラビア語とウォライタ語はアフロ・アジア (Afro-Asiatic) 語族の言語である。これら4言語は概略大陸の北部に位置する。

こういった言語領域の位置関係から、本書では論文の掲載順を、西から東へ、そして北から南へということとした。従って、第1章序論の後、第2章バンバラ語 (マリ)、第3章アカン語 (ガーナ)、第4章ジュバ・アラビア語 (南スーダン)、というふうに並んでいる。読者は、こういった順にとらわれずに、どれから読み始めても構わない。

3. 表記

本書は、本邦初のアフリカ諸語の声調・アクセントに関する論文集である。アフリカは広大な地域であり言語の数も多く、様々な伝統を持って研究され

2 梶 茂樹

てきた。そのため、用いる用語、表記も様々である。本書では、あえて用語の統一はせず、用いる用語は各著者に任せることにした。しかしながら、現地語表記は、文字（正書法）表記はせず、IPA（国際音声字母）の簡略表記とした（精密表記ではないという意味）。従って、異音のレベルの音を書き分けている。ただし、[r] については、他に [r̥] などが無い場合は r で書いている場合がある。また声調のダウンステップも IPA では \downarrow であるが、! やその他の場

地図 1. 本書で扱う言語の地理的分布¹



¹ この地図は以下のファイルを一部改変する形で作成されたものである。

Africa_map_blank.svg by User:Sting. Based design on File:African_language_families.png by User:Mark Dingemans. Boundaries compiled from various Ethnologue country maps, as also compiled in Mutturzikin [Retrieved from https://en.wikipedia.org/wiki/File:Map_of_African_language_families.svg <https://en.wikipedia.org/wiki/File:Map_of_African_language_families.svg>]

元ファイル同様、本地図も CC BY-SA 4.0 (<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>) の条件に基づいて公開される。

合がある。

アフリカ諸語は伝統的に文字を持たなかったものが多い。しかし 20 世紀になると、聖書翻訳などを通じて正書法ができたり、また、そうでなくても書き方が固定化している場合がある。ただ、その方法は、英語圏、フランス語圏、ポルトガル語圏などでまちまちである。とりわけ英語圏では [ʃ] や [ç] を ch で、そして [dʒ] や [j] を j で表すことが多い。そして [j] を y で書く。本書ではこれらをすべて止め、[ʃ]、[ç]、[dʒ]、[j]、[j] は、それぞれ ʃ、ç、dʒ、j、j で書いてある。

4. アフリカ諸語の幾つかの特徴について

4.1 名詞の形態論的特徴

声調のパターンを考える際に、単語の形態論的構造を押さえておくことは重要である。アフリカの言語は概して形態論が複雑な言語が多く、また言語によって形態論的構造が大きく異なり、それが声調に大きく影響するからである。とりわけバンツー系諸語の場合、通常、名詞のクラスがあり²、これが声調のパターンに大きく係る。

バンツー系諸語では、名詞は最大「前接辞-接頭辞-語幹」という構造をしている。名詞がどのクラスに属するかは、形態論的には名詞の接頭辞 prefix で示される³。名詞接頭辞の声調は多くの言語で、文法的に低声調 L と決まっている（バンツー系祖語でも L だったと言われている⁴）。従って、声調のパターンを考える際にはこれを外して語幹のみを考えることが多い。ただし、テンボ語やニョロ語、ロンボ語、ヘレロ語などは、それぞれ理由は異なるが、接頭辞の声調が高声調 H であったり低声調 L であったりする。語幹 stem の部分はどのクラスで用いられても原則、声調も含め一定である⁵。

前接辞 augment というのは接頭辞の前に付く要素で、スワヒリ語など、こ

² 稀にコンゴのピラ語のように名詞のクラスがない言語もある。またコンゴの多くのスワヒリ語方言のように形態論的に接頭辞はあるが、統語論的にはほとんど機能していない言語もある。

³ 名詞がどのクラスに属するかは形態論だけでなく文法的な一致という統語論も関係しているがここでは触れない。

⁴ またガーナのアカン語でも概ね L である。

⁵ この点は名詞の声調を考える場合、重要である。例えば、5.4 節で述べる鼻音が接頭辞の場合、単語全体の声調をどう保持するか、あるいはしないかが問題となる。

4 梶 茂樹

れない言語も多い⁶。ある言語も、用いられ方は様々で、テンボ語やベンデ語のように、英語などの定・不定の冠詞的役割を果たす言語も多いが、そうでない言語もある。以下、ウガンダのニョロ語の名詞のクラスを例と共に示す。1a、2a のようにアルファベットをイタリックにしてあるのはそれぞれクラス 1、クラス 2 のサブクラスで⁷、ニョロ語のように 1a では接頭辞を取らない言語が多い。2a では他のクラスの接頭辞とは違って接頭辞の母音が長くなったり声調が違ったりという言語が多い。サブクラスというのは接頭辞という形態では異なるが、統語論的には同じ振る舞いをするものということである。米田論文のヘレロ語では分析の都合上、ここで言う接頭辞を名詞接頭辞と呼び、そして前接辞と接頭辞を合わせたものを接頭辞と呼んでいる。

(1) にニョロ語の例を示す。1 行にクラス番号、基底形、単独形、意味の順に並べてある。- は前接辞、接頭辞、語幹の境界を表す。∅ はゼロ記号である。

(1) ニョロ語の名詞のクラス

class 1	o-mú-ntu	omû:ntu	「人間 sg.」
	1a ∅-∅-tá:ta	tâ:ta	「父 sg.」
class 2	a-bá-ntu	abâ:ntu	「人間 pl.」
	2a ∅-ba:-tá:ta	ba:tâ:ta	「父 pl.」
class 3	o-mu-tí	omú:tí	「木 sg.」
class 4	e-mi-tí	emítí	「木 pl.」
class 5	e-ri-íso	erí:so	「目 sg.」
	e-i-ǰúmu	i:ǰúmu	「槍 sg.」
class 6	a-ma-íso	amá:iso	「目 pl.」
	a-ma-ǰúmu	amaǰúmu	「槍 pl.」
	a-ma-rému	amalêmu	「戦争 pl.」
	a-ma-gúru	amagûru	「脚 pl.」
class 7	e-ki-tábu	ekitábu	「本 sg.」
class 8	e-bi-tábu	ebitábu	「本 pl.」

⁶ テンボ語の梶論文では、これを増補辞と呼んでいる。形態は、母音 1 個だけの言語が多いが、CV-の言語、さらには声調だけで表す言語もある。母音 1 個だけの場合は、ニョレ語の宮崎論文や、ベンデ語の阿部論文、ヘレロ語の米田論文のように冒頭母音と呼ぶこともある。

⁷ サブクラスを 1a のようにイタリックで表すのは、1a とすると、しばしば「ラ」と読まれるからである。

class 9	e-m-búzi	embûzi	「山羊 sg.」
class 10	e-m-búzi	embûzi	「山羊 pl.」
	e-n-rími	endîmi	「舌 pl.」
class 11	o-ru-rími	orulîmi	「舌 sg.」
class 12	a-ka-ráso	akarâso	「矢 sg.」
class 13	o-tu-ráso	oturâso	「矢 pl.」
class 14	o-bu-ráso	oburâso	「矢 pl.」
	o-bu-rému	obulêmu	「戦争 sg.」
class 15	o-ku-gúru	okugûru	「脚 sg.」
class 16	a-há-ntu	ahâ:ntu	「場所」
class 17	o-ku-zímu	okuzîmu	「あの世」
class 18	o-mu-n-dzú ⁸	omú:ndzû	「家の中」
class 19	e-i-fó	í:fó	「下方」

バンツ一系の名詞クラスは数が多い。以上はニョロ語の場合であるが、言語によってはテンボ語のように、さらに指小辞 (*diminutive*) のみのクラスがあったり⁹、ニョレ語のように指大辞 (*augmentative*) クラスがあったりする¹⁰。クラスは、通常 cl.1 と cl.2、cl.1*a* と cl.2*a*、cl.3 と cl.4 という風に2つがペアになり、一方が名詞の単数形、他方がその対応する複数形を表す。また cl.9 と cl.10 のように単複同形のものや、cl.14 のように単数形を表したり、また逆に他のクラスの複数形であるクラスもある。なお、cl.16、cl.17、cl.18、cl.19¹¹ はいわゆる場所クラスで単複の区別はない¹²。

名詞のクラスというのはアフリカではバンツ一系諸語が有名であるが、こ

⁸ 「家 sg.,pl.」は e-n-dzú [é:ndzû] である。この語の語幹は -dzú で、n- は cl.9/10 の接頭辞である。このように場所クラスの接頭辞が名詞に付く場合は、名詞の接頭辞をそのまま取り込むことが多い。

⁹ クラス接頭辞 hi- (sg.)。梶論文では cl.19 となっている。対応する複数クラスは cl.13。

¹⁰ 宮崎論文では、cl.20 クラス接頭辞 gu- (sg.)、cl.22 クラス接頭辞 ga- (pl.) となっている。

¹¹ ここで cl.19 というのは、ニョロ語の最後のクラス番号を振ってあるからである。他の言語では cl.20 や cl.23 など別の番号が振られていることが多い。またこの第4の場所クラスがない言語も多い。

¹² 名詞のクラス接辞には、その他、抽象名詞や動名詞を形成するなど多様な機能がある。

これはバンツー系諸語が属すニジェール・コンゴ語族全体に係る特徴でもある。ただ西アフリカに行くと、ニジェール・コンゴ系でもクラスが明確でなく、単に痕跡的に付いているだけのように見える言語もある。古閑論文のガーナのアカン語がそうで、名詞接頭辞はあるが主として名詞の単複を表すのみである。またバンバラ語などのマンデ系諸語では名詞に譲渡可・不可の区別はあるが、名詞のクラスはない。本稿での例はないが、セネガル、マリ、カメルーンなどで話されるフルベ語のように、クラス表示に接頭辞ではなく接尾辞を用いる言語もある。アフロ・アジア語族の言語では、若狭論文のウォライタ語のように、名詞変化が複雑で、名詞語尾が様々な機能を示す。そしてこの語尾がウォライタ語では名詞全体のアクセントに係るのである。同じアフロ・アジア語族でも仲尾論文のジュバ・アラビア語はクレオールであるということもあり、名詞構造は単純である。

4.2 語族

アフリカには4つの語族がある¹³。北から、アフロ・アジア (Afro-Asiatic) 語族、ナイル・サハラ (Nilo-Sahara) 語族、ニジェール・コンゴ (Niger-Congo) 語族、コイサン (Khoisan) 語族である¹⁴。語族は、英語では通常、分類学上の属 family の用語を用いるが、近年、アフリカでは属 family より上の門 phylum という用語を用いることが多くなってきた。例えば、ニジェール・コンゴであるが、これを語族 family という人もいれば大語族 phylum という人もいる¹⁵。また英語では phylum と言いながら日本語で書く時は語族という人もいる。本書では用語は個々の著者に任せてあり統一していない。

¹³ これはアメリカの言語学者 J・グリーンバーグの説であり (Greenberg 1963)、概ね踏襲されているが、細かいところでは議論がある。なお、系統的にアフリカの言語という時、通常、南アフリカのアフリカンス語や英語、またケニアのグジャラティ語などは除く。これらはインド・ヨーロッパ語族の言語である。またマダガスカルのマダガスカル諸語もここでは含めない。マダガスカル諸語はオーストロネシア語族の言語である。

¹⁴ アフリカの語族名は2つの用語の組み合わせで表現している。そして通常、間に・を入れる。ただしコイサン (Khoisan) 語族は、元々は Khoi「ホッテントット」、San「ブッシュマン」の組み合わせであるが、言語的には分ける意味はないということで1つにして表現することが多い。また、それ以外でも、ウォライタ語論文の若狭氏のように、アフロ・アジアを、アフロとアジアの間に・を入れない人もいる。英語でもハイフンを入れて Afro-Asiatic と書く人と、入れずに Afroasiatic と書く人がいる。このあたりは必ずしも徹底しているわけではない。

¹⁵ 分類学上の門という用語はそのまま言語には使えず、日本語では大語族という用語を充てることが多い。

門 *phylum* というのは分類学上、属 *family* より大きい括りであるが、これは例えば、ニジェール・コンゴと言っても、1つの語族として証明されているわけではないということと関係している。例えばマンデ系諸語はニジェール・コンゴには属さないという人もいる。またニジェール・コンゴはナイル・サハラと1つにまとめられるという人もいる。決して一筋縄ではないのである。そういった状況の中、従来の属 *family* で括るのはどうかという議論があるのである¹⁶。以上のようなことも含め、もう少し緩く括るということで、属 *family* の上の門 *phylum* という用語を用いるようになったということである。もし門 *phylum* を認めるなら、マンデ系諸語は属 *family* であって（すなわちマンデ語族）、ニジェール・コンゴ全体が門 *phylum*（すなわちニジェール・コンゴ大語族）ということになる。ただ先にも言ったように、*phylum* を大語族と言わずに語族と言う人もいるので、その場合は、マンデ系は語派 *branch*（すなわちマンデ語派）ということになる。

なお、バンツー系というのは系統的にはニジェール・コンゴ語族の中のベヌエ・コンゴ語派のさらに下位部分である。赤道以南の広大な地域に話されており言語数も多いが、語彙と文法は比較的均一な体系を保っている。しかし声調・アクセントに関しては、本書で示すように多様である。なお、英語表記で用いられる *Bantu*（フランス語では *bantou*）という用語であるが、日本語では、口で言う場合は [bantsur:] であるが、書く場合はバンツ、バンツー、バントウ、バントウの4つが行われている。

5. 声調、アクセント

アフリカには声調・アクセント言語は多い。そしてタイプも多様である。言語が系統的に近く、語彙、文法がお互い似ていても、声調・アクセントが異なることがままあり、それが言語区分の1つのメルクマールとなっていることがある¹⁷。また、アフリカの声調・アクセント言語の大きな特徴として、文法的機能が豊富であるということがある。この点は、アジア諸語とは異なる大きな点である。

¹⁶ インド・ヨーロッパ語族の場合は範囲がはっきりとしており、語族 *family* を用い、大語族 *phylum* は用いない。

¹⁷ 本書のテンボ語、ニョロ語、ニョレ語の記述にこういった指摘がある。スワヒリ語マクンドゥチ方言では逆に、声調もアクセントもないということが、他のスワヒリ語諸方言と異なる点となっている。

8 梶 茂樹

ただ、本書では用語の統一はしていないので、声調、アクセントという基本的用語についても著者の用いる用語をそのまま使っている。したがって、同じような現象を、著者によって声調と言ったりアクセントと言ったりしている場合がある。しかし読者にとっては、各自の定義に従って、(声調とアクセントを区別する場合は)、これは声調だ、これはアクセントだと容易に分かることなので、必要な場合は各自読み替えていただきたい。なお、ジュバ・アラビア語とマア語は著者がトーンという用語を使っているが、これは声調と読み替えてよさそうである。またツォンガ語も、論文が英語のため *tone* という用語を用いているが、これも声調と読み替えてよさそうである。以下、各著者の記述で使っている用語である。

(2) 言語ごとの声調、アクセントなどの用いられ方

a. 声調

バンバラ語 (マリ)、アカン語 (ガーナ)、テンボ語 (コンゴ)、ニョロ語 (ウガンダ)、ニョレ語 (ウガンダ)、ロンボ語 (タンザニア)、ベンデ語 (タンザニア)、ヘレロ語 (ナミビアなど)

b. トーン

ジュバ・アラビア語 (南スーダン)、マア語 (タンザニア)

c. *tone*

ツォンガ語 (南アフリカなど)

d. アクセント

ウオライタ語 (エチオピア)、スワヒリ語マクンドゥチ方言 (タンザニア)

5.1 ピッチ、調値

アフリカ諸語のピッチには、以下の7つの種類のものが現れる¹⁸。

- (3) 1. 高平板調 H (high) アキュートアクセントで表記 á
2. 低平板調 L (low) グレーブアクセント à で表記、あるいはマークなし a
3. 下降調 F (falling) 山型アクセントで表記 â

¹⁸ 音声的には様々な高さがある。特に、後から述べるダウンドリフトが絡む場合はそうである。ここでは細かな音声ではなくタイプとしてのピッチを述べる。

4. 上昇調 R (rising) 逆山型アクセントで表記 \check{a}
5. 中高平板調 M (mid)立型アクセント \acute{a} 、あるいは横アクセント \bar{a} で表記
6. ダウンステップ H 上付きの下向き矢印 \downarrow で表記
7. 超高平板調 H (super high) 上付きの上向き矢印 \uparrow で表記

音声的には様々な現れがあるが、基本的単位は H と L のみである¹⁹ (場合によっては以下で述べるダウンステップ H を加える場合もある)。この点が、H、L のみならず F や R をも基本単位として持つ漢語方言や東南アジア諸語などとは異なるところである。また音節末子音の消失による声調の発生などもアフリカでは確認されていない²⁰。

5 つ目の声調の中高平板調には 2 つの場合がある。ダウンドリフト (downdrift) によるものと、6 のダウンステップ (downstep) によるものである。ダウンドリフトとは (4a) *émúlumé* のように、L (lu) の後の H (mé) が、L の影響でその前の H (émú) より少し低く実現される現象である。あるいは (4b) *mufúníkó* のように、前に H がなくても L (mu) のあとでも起こりうる。またダウンドリフトは (4c) のヘレロ語の例のように連続して起こることもある。こういう場合 H は (そして L も) その都度より低く実現されることになり、場合によっては最後の H は最初の L より低くなることも珍しくない²¹。

- (4) a. テンボ語 *émúlumé* HHLH → [ˈ ˌ ˌ -] 「男 sg.」
 b. テンボ語 *mufúníkó* LHHH → [ˌ - - -] 「蓋 sg.」
 c. ヘレロ語 *óǰhákáutú* HHLHLH → [ˈ ˌ ˌ - ˌ -] 「芋 sg. (提示形)」

ダウンステップはダウンドリフトと似ている部分はあるが、別の現象であ

¹⁹ ただしこれが解釈として H と L なのか、H と Ø の欠如的關係 (privative relation) なのかははっきりとしない。欠如のと、はっきり述べているのは、ロンボ語の品川論文とツォンガ語の Lee 論文である。また、ニョレ語の宮崎論文では、単位として H、L、Ø の 3 つの可能性が指摘されている。

²⁰ ただし、例えばニジュール・コンゴ語族の大西洋語派には、声調のある言語とない言語とがあり、比較研究を行えば、モンクメール系言語とベトナム語の関係のように、声調発生のメカニズムが明らかになる可能性がある。

²¹ ジュバ・アラビア語の仲尾論文では、HLL において H の後の最初の L が十分に下がらざらず M のように発音されるという指摘がある。例: *sáhara* [sáhàrà] 「徹夜仕事」。

る。テンボ語の南に話されるシ語²²の例を見てみよう (5a)。これは (4a) のテンボ語の *émúlúmé* 「男 sg.」と同じ単語 (同源語) である。シ語の *ómúlúmé* では L は生じず、テンボ語の *lu* はシ語では *lú* となっている。これはシ語では *lu* の L がその前の *mú* の H に同化したためである。*mé* の高さはテンボ語の *mé* と同じである。これはダウンステップ H がダウンドリフトから生じる典型的な例である。基底では、シ語の *ómúlúmé* 「男 sg.」もテンボ語の *émúlúmé* 「男 sg.」同様、HHLH とすることが可能である。(5b) のバンバラ語の *bálá'té* は HHM の発音であるが、M は *té* の前にある浮遊 L の作用により生じたものである ((6c) 参照)。ダウンステップ H は、また、(5c) のアカン語の例のように L の作用がなくても生じる。また (5d) のロンボ語や (5e) のツォンガ語の例のように、H が 2 つ並ぶことを嫌う異化作用によっても生じる。

- (5) a. シ語 *ómúlúmé* HHHM [ˈ ˌ ˌ ˌ] 「男 sg.」
 b. バンバラ語 *bálá'té* HHM [ˈ ˌ ˌ] 「そのバラフォンではない」
 c. アカン語 *kó!tó* HM [ˈ ˌ] 「蟹 sg.」
 d. ロンボ語 *m̩jé⁺lé* LHM [ˌ ˌ ˌ] 「米 sg.,pl.」
 e. ツォンガ語 *í⁺ŋ^wá:ná* HMM [ˈ ˌ ˌ] 「それは子供ではない」

なお、ダウンステップ H の表記であるが、シ語の *ómúlúmé* のように垂直アクセントで表す場合も、また場合によっては *ómúlúmē* のように横アクセントで表すこともあるが、これらは本来ダウンステップ H であるかどうかに関わりなく M を表記するものである。多くはバンバラ語の *'té* やアカン語の *!tó* のように、ダウンステップ H の前に ! を置き、ダウンステップ H 自体はアキュートアクセントで表す。この場合、バンバラ語の *'té* のように ! を上付きにすることが多い。またロンボ語やツォンガ語のように ! ではなく ⁺ で表すこともある。⁺ は言語表記としては一般的ではないが視覚的な音声表記としては分かりやすく、IPA 表記はこれである。この点、本書では IPA 表記と言いながら統一が取れていない。

5.2 浮遊声調

H や L の声調が分節素を伴わずに存在することがある。つまり声調のみの形態素である。(6) の例はバンバラ語の例であるが、(6a) では単語の境界を表

²² シ語はテンボ語と近い親縁関係にある。データは筆者のフィールドノートによる。

す浮遊 H が右の断定を表すコピュラ don に付き、H が don の L と合体し don に下降調 F が生じている。(6b) は名詞が単独で発音される場合、名詞の限定を示す浮遊 L が前の単語 só「家」の H と合体し só に下降調 F を生じさせている。(6c) は (5b) で述べたダウンステップ H が生じる派生である。ここでは、名詞の限定を示す浮遊 L が後に続く否定の té の H の声調を低くし M とする。

(6) a. 浮遊 H (floating H)

ba´don → ba dôn 「ヤギだ」

b. 浮遊 L (floating L)

só` → sô 「その家」

c. 浮遊 L (floating L)

bálá`té → bálá'té 「そのバラフォンではない」

ヘレロ語にも似たような状況が生じる。(7) はヘレロ語の名詞の接頭辞と語幹を挟んだ例である。本来、接頭辞に付く H は分節素がないため浮遊 H となり、(7a) のように語幹初頭が L だと語幹初頭に付き、(7b) のように語幹初頭が H だと左の接頭辞に付く。また浮遊 L は場合によっては (7c) のように、左右に作用を及ぼさず消える。

(7) a. 浮遊 H (floating H)

e´-tiva → etíva 「芋虫 sg. (補語形)」

b. 浮遊 H (floating H)

e´-kópi → ékópi 「カップ sg. (補語形)」

c. 浮遊 L (floating L)

é`-kópi → ékópi 「カップ sg. (提示形)」

5.3 単位

TBU (tone bearing unit) 「声調を担う単位」²³が音節であるかモーラであるかはその言語の大きな特徴である。本書所収の 13 編の論文で扱われている言語

²³ ニョロ語の梶論文では「声調負荷単位」、ロンボ語の品川論文では「声調保持単位」と呼んでいる。

12 梶 茂樹

での用語の使い方の分布は (8) の通りである。こうしてみると、ほとんどが音節を TBU とする言語である。ただ音節、モーラも定義は各著者に任せてある。稀だが、ウォライタ語のように、語幹は音節、語尾はモーラというものもある。

(8) a. TBU が音節である言語

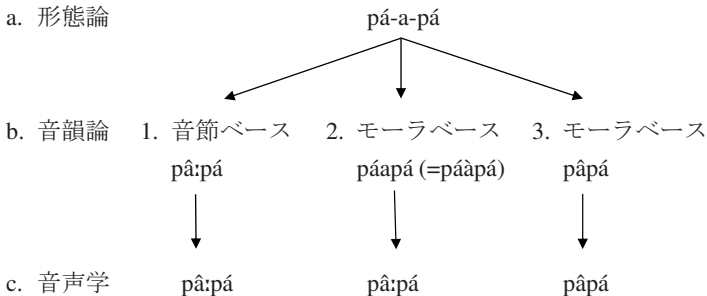
バンバラ語、アカン語、ジュバ・アラビア語、ウォライタ語（語幹）、ニョロ語、ニョレ語、ロンボ語、マア語、スワヒリ語マクンドウチ方言、ベンデ語、ヘレロ語、ツォンガ語

b. TBU がモーラである言語

テンボ語、ウォライタ語（語尾）

TBU が音節であるかモーラであるかに関しては、表記、特に長母音の扱いが重要である ((9) 参照)。例えば、もし [pá:pá] のような語を páápá (あるいは páápá) と書けば、この言語はモーラ・カウンティングで、3 モーラ語と言っていることになる。それに対して、pâ:pá と書けば、この言語は音節カウンティングで長母音があり、この語は 2 音節語ということになる。前者ならば páápá は、CVCVCV 構造の kíróbé などと同じパターンということになるし、後者ならば pâ:pá は CVCV 構造の kíró などと同じパターンを示すということになる (ただし短母音には F は実現されないという言語もある)。いずれにしても、[a:] が、形態論 (9a)、音声学 (9c) と区別された音韻論的観点 (9b) から見て 1 個の長母音か (9b1)、2 個の短母音か (9b2) を決める必要がある。この点、表記は音韻論的である。さらに言語によっては連続する母音が融合その他で 1 モーラ化する場合がある (9b3)。この場合も、単語は 2 モーラ語である。そして、この言語には母音の長短の区別はない。

(9) a. 形態論



なお、テンボ語の梶論文では、従来、何が声調を担うかということ（例えば時制標識 -á- が H を担う）と、声調が実現される範囲（時制標識 -á- は例えばその前の主語接頭辞 n-「私」と合体 1 モーラ化し、-á- の H はモーラ ná の中で実現される）とが混同されているとし、TBU (tone bearing unit) 「声調を担う単位」と TRU (tone realization unit) 「声調実現単位」とを区別することを提唱している。この区別によれば、従来の TBU 「声調を担う単位」というのは、TRU 「声調実現単位」ということになる。

5.4 鼻音が声調を担うか

声調を担うのは通常は母音であり、それを実現するのはモーラであり音節である。鼻音、とりわけ同器官的鼻音 (homorganic nasal) ²⁴ が声調を担い実現するかどうかはおもしろいテーマである。これは結論から言うと、言語によって異なる。例えば内マア語では、(10a) のように、クラス 1、クラス 3 の接頭辞 m- は成節性があり²⁵、声調を担いその中で実現するが（ただし L）、(10b) のように、クラス 9,10 の同器官的鼻音接頭辞 m-, m̃-, n-, ŋ- は成節性がなく、本来、声調を持っていたとしても実現することができない。(10c) はロンボ語の例であるが、クラス 3,10 の成節性を持つ鼻音は単独形で H を実現する。しかし同じ環境で、同器官的鼻音は成節性がなく H を実現することはできない。

- (10) a. m̃lagé 1, valagé 2 「妻 sg.」
 b. mbúka 9,10 「野菜 sg.,pl.」
 c. m̃psalé 3,10 「矢 sg.,pl.」

ベンデ語も同器官的鼻音は声調を実現できない。(11a) では単数形の lúfukú 11 「日」は接頭辞の lú- に H を持つが、その複数形の m̃fukú 10 「日々」は、接頭辞 m̃- が後続の f と同器官的であり、単独形では H を実現できない。しかし、その前にコピュラの ni が用いられると、接頭辞が本来持つ H が ni の上に実現される。ただし、コピュラ ni の声調は L であるため L と H が合

²⁴ 同器官的鼻音と後続の子音を合わせて前鼻音化子音 (prenasalized consonant) と呼ぶことがある。その場合は前鼻音の部分。

²⁵ この m̃ は多くのバンツー系諸語で mu として母音を伴って現れる。

14 梶 茂樹

体し R となる。単数形は変化なしである。

- (11) a. lúfukú 11, mfukú 10 「日」
b. ni lúfukú 11, ñ mfukú 10 「それは日（々）です」

ベンデ語などとは異なって、同器官的鼻音も単独形で声調を持ち実現する言語もある。(12) はテンボ語の例であるが、同器官的鼻音接頭辞の η -、 m - と H を持ち実現している。同様に、アカン語も鼻音が声調を持ちうる。(13) は所有構文であるが、(13a)では形態素内部の同器官的鼻音 η が L を担い、(13b)では名詞接頭辞の同器官的鼻音 η が H を担っている。

- (12) a. η goko 9,10 「ニワトリ sg.,pl.」
b. mbikó 9,10 「蓄え sg.,pl.」
(13) a. Kofí pójókó 「コフィの馬」
b. Kofí η gómá 「コフィの毛皮」

また (14) のニョロ語では、(14a) は単語の終わりから 2 音節目に H が来るタイプの名詞であるが、終わりから 2 音節目が同器官的鼻音 n であるため、そこで H が実現したもの（ただし単独形では F となる²⁶）、そして (14b) は単語の最後の音節に H が来るタイプの名詞であるが、単独形でその H が 1 音節前に予期され、同器官的鼻音 n に H が実現したものである（本来の H は F として残る）。

- (14) a. /ńte/ → $\hat{n}te$ 9,10 「(それは) 牛 sg.,pl.である」²⁷
b. /ndá/ → $\acute{n}d\acute{a}$ 9,10 「(それは) 腹 sg.,pl.である」

5.5 語彙的区別

一般にアフリカ諸語では声調・アクセントの語彙弁別機能は高くない。この点が、同じ声調言語といっても、漢語などとは異なる点である。恐らく、アフリカ諸語は単語が長いということと関係しているのであろう。もちろん、パタ

²⁶ F となるのは接頭辞が同器官的鼻音 n であるからではない。この環境では CV- 構造であっても同じく F である。

²⁷ ニョロ語では名詞が前接辞なしで用いられると、それだけで述語名詞となり文を構成する。

ーンが2つしかないニョロ語のような言語でも、声調による最小対はある。しかし逆に4型のニョレ語のような言語で最小対がないということも生じる²⁸。ただし最小対はなくとも、声調は単語の認知に大きな役割を果たす。具体例は、各論文を見ていただきたい。

5.6 パターン数

言語がいくらのパターン数を示すかは、その言語の性格を知るためには極めて重要である。興味深いことに、本書所収の言語をパターンごとにまとめると、極めてばらけたパターンを示すことになった。ただ、言語ごとに様々な細かいことがあり、(15)の仕分けは目安として見ていただきたい。例えば、バンバラ語は3型としておいたが、実際は3以上のパターンが現れる。ただし基底ですべてH、すべてLと考えられる単語が多いことから従来2型の言語とされてきた。マア語は2ⁿ型²⁹としてあるが、Hが名詞語幹の中で2ヶ所に分かれて出てくることはないので、2ⁿ型でない可能性がある(2ⁿ-α)。またツォンガ語も2ⁿ型ではあるが、3音節語幹では、すべてLのLLLを別として、LLHやHLLなどLが2つ続くパターンは生じない(2ⁿ-β)。逆にテンボ語では2ⁿ型としてあっても2ⁿに収まらないパターンが幾つも生じる(2ⁿ+γ)。なお、声調なしのスワヒリ語マクンドゥチ方言では、単語のすべての音節がほぼ同じ高さで発音される。

(15) 各言語のパターン数

- a. なし
スワヒリ語マクンドゥチ方言
- b. 1型
なし³⁰
- c. 2型
ニョロ語

²⁸ これは調査の現段階でということで、調査が進めば最小対が見つかるということはある。

²⁹ n は単語を構成する TBU (音節あるいはモーラ) 数である。

³⁰ 本書にはないが、ウガンダのトーロ語は1型である。梶 (2006)、Kaji (2009) 参照。

16 梶 茂樹

d. 3型

バンバラ語、ウォライタ語、ベンデ語

e. 4型

ニョレ語

f. 5型

アカン語（名詞語根に関して。接頭辞、接尾辞は含めない）

g. n+1型

ジュバ・アラビア語

h. 2ⁿ型

1. 名詞語幹に関して（接頭辞は含まない）

ロンボ語、マア語、ヘレロ語、ツォンガ語

2. 名詞全体に関して（接頭辞を含む）

テンボ語

5.7 声調規則

H、Lの声調は、多くの場合、固定的ではない。HがLになったり、また逆にLがHになったりする。(16)に、本書に見られる主だった音韻的（文法的ではない）声調規則を列挙する。ただし細かい条件は省略する。浮遊声調については、(6)、(7)に例が挙がっているので、ここでは繰り返さない。

(16) a. Hの右移動：HLL → LHL ロンボ語

b. Hの左移動（予期）：LH → HF³¹ ニョロ語、L#H → H#L³² ロンボ語

c. Hの右拡張³³：H∅ → HH ロンボ語、ツォンガ語、HL → HH ヘレロ語

d. Hの左拡張：∅H → HH テンボ語、LH → HH マア語、ベンデ語

e. HHの右のH削除（メーウセンの規則）：HH → HL ロンボ語、ヘレロ語

f. HHの左のH削除（逆メーウセン規則）：HH → LH ロンボ語

g. 右のHの異化：a) HH → HM ツォンガ語、b) ヘレロ語 HHH → HMM³⁴

³¹ 移動が完全ではなく、本来のHが痕跡としてFとして残る。

³² #は語境界を示す。

³³ 拡張という場合、∅にHが拡張するというのが普通であるが、∅を用いずにHとLで処理している場合はヘレロ語のようにHL → HHとなる。

³⁴ ヘレロ語はHが3つ並ぶ必要あり。

- h. 左の H の異化 : a) LH#H → LL#H テンボ語、ニョレ語、 b) HH#H → LL#H ニョレ語
- i. H の L への同化 : LH#L → LL#L テンボ語
- j. L の異化 : L#L → H#L テンボ語、ニョレ語
- k. 平板化 (plateauing) : HLH → HHH ロンボ語
- l. 極性化³⁵ (両極化) : ジュバ・アラビア語、テンボ語、ニョレ語、ロンボ語

声調規則にはしばしば、声調以外のものが関係する。(17) はツォンガ語の例であるが、H の拡張は一定の名詞句内には及ばない。

(17) H 拡張の阻止 : H#[Ø#Ø]³⁶ → *H#[H#H] ツォンガ語

(18) は分節素が関係する例である。(18a) では H が鼻音 (n で代用) の上では実現できず、その前の語の音節に移動する (L が R で実現)。(18b) はツォンガ語の例で、いわゆる降圧子音 (depressor consonant) によるものである。H は本来、右に拡張するのであるが、降圧子音がそれを阻止する。

(18) a. L#n → R#n ベンデ語

b. H 拡張の阻止 : HdØH³⁷ → *HdFH ツォンガ語

また分節素の脱落によってピッチの変化が起こることもある。(19) はジュバ・アラビア語の例であるが、(19a) では子音 b の脱落により jí の H と bu の L が合体し F となっている。また、(19b) では母音 í の脱落により ní の H がその前の gi の L と合体し R となっている。

³⁵ 逆の声調になる。

³⁶ [] は名詞句など一定の統語構造を示す。[] 内の Ø と H は 1 以上である (Ø_i, H_i)。

³⁷ d としたのは 降圧子音 (depressor consonant) である。ツォンガ語では、氣息音 (breathy)、有声音 (voiced)、帯気音 (aspirated) の 3 種類がある。降圧子音がない場合は HØH は HFH となる。

- (19) a. jíbu → jî:b 「持って来る」
b. giníta → gînta 「肛門」

5.8 文法的区別

アフリカ諸語の声調・アクセントで特徴的なのは、その文法的機能である。テンス・アスペクトの区別や、格変化、動名詞化、関係節の形成、従属節と区別された主節の形成など様々である。(20) に、本書で挙げられている声調・アクセントによる最小対を示すものを列挙する。

(20) 文法的機能

- a. バンバラ語
浮遊 L が名詞の限定性を示す。浮遊 H が単語の境界を示す。
- b. アカン語
声調が所有関係を表す。
- c. ジュバ・アラビア語
人名形成、動名詞形成、受動態形成
- d. ウォライタ語
具体主格と非具体主格の格の区別、普通名詞から地名名詞（曜日名）の形成
- e. テンボ語
時制・アスペクト・ムードの区別、関係節の形成、呼格の形成
- f. ニョロ語
時制・アスペクト・ムードの表現と区別、形容詞の付加的用法と述語的用法の区別、動詞の関係節の形成、動詞の従属節の形成、同一指示代名詞構文の形成
- g. ニョレ語
遠過去完了と近過去完了の区別
- h. ロンボ語
焦点機能と関係した主節定動詞と従属節動詞の区別、また肯定形と否定形の区別
- i. マア語
関係節の形成

- j. スワヒリ語マクンドゥチ方言
なし
- k. ベンデ語
今日の完了形と継起過去形の区別
- l. ヘレロ語
声調による格変化。基本形（文の主語になる）、補語形（動詞の目的語になる）、提示形（文の述語となる）の区別³⁸
- m. ツォンガ語
2人称単数と3人称単数の主語接頭辞の区別

これ以外にも、声調の文法的機能には様々なものがある。例えばウガンダのトーロ語では名詞句の定・不定が声調によって決まることが報告されている³⁹。

5.9 歴史的変化

声調の歴史的変化については本書では扱わないが、幾つかの論文でバンツ一祖語との対応に言及する箇所がある。ロンボ語では (21a) (21b) のように、一見バンツ一祖語の声調を保持しているように見えるものもあるが、逆に (21c) のように逆転している場合もある。これは単語をどの環境で発音するかということと大きく関わっている。

声調の逆転現象だとはっきり分かるのは (22) のテンボ語の例である。また、ベンデ語の阿部論文とニョレ語の宮崎論文でも、著者ははっきりとは述べていないが、声調の逆転現象と思われる例が見られる。(23)(24) のような例である。

(21) ロンボ語

- a. *du-dími⁴⁰ > ú-lúmi 「舌」
- b. *i-béede > í-véí*é 「乳房」
- c. *du-jádà > ú-faá 「爪」

³⁸ この3つの形の機能、用法は一樣ではなく、ここで示したのは典型的用法である。

³⁹ omuntu óndi “another person” vs omúntu óndi “the other person” (Kaji 2009: 245)。

⁴⁰ *はバンツ一祖語の形を示す。

(22) テンボ語

- a. *mu-jóno > mú-jupú > ... > mu-nú 「塩」
- b. *ma-jábú > má-jabu > ... > ma-fu 「酒」
- c. *n-kókó > ŋ-goko 「ニワトリ」
- d. *bu-túko > bú-tʰufú 「夜」

(23) ベンデ語

- a. *ku-godo > kú-yúlú 「足」
- b. *ma-kúta > má-futá 「油」
- c. *bamb- > kú-βámbá 「(革を) 張る」

(24) ニョレ語

- a. *ku-godo > o-hú-gúlú 「脚、足」
- b. *poni > e-púní 「鳥」

6. 各論文のまとめ

以下、各掲載論文を私なりに、特にパターンに注目しながら、まとめたものを示す。読者は、これを見ながら、どれをどう読むかの目安としていただきたい。論文掲載順に並べてある。

6.1 小森論文バンバラ語 (ニジェール・コンゴ語族マンデ系、マリ)

バンバラ語名詞の声調は、基本的には1音節語は H と R、2音節語は HH と LH、3音節語は HHH、LLH、LHH、4音節語は HHHH、LLLH、LLHH のように音節数が増えても、パターン数は概ね3止まりである。5音節以上の語は少ないが、5音節語では HHHHH、LLLHHH、LLHHH の3パターンとなる。これをどう解釈するか幾つかの方法が提示されるが、まだ決定的と言えるものはない。従来は単語全体が H かあるいは LH の2パターン言語と見られることが多かったが、それでは不十分であることは明らかである(例えば3音節語では LLH と LHH の区別ができない)。この問題には、浮遊声調の H (単語の境界を示す) と L (名詞の限定性を示す) をどう処理するかが鍵となる。

6.2 古閑論文アカン語 (ニジェール・コンゴ語族クワ系、ガーナ)

アカン語は、基本声調は H と L の2つであるが、ダウンドリフトに加え、ダウンステップが頻繁に現れるという特徴がある。この言語の名詞にも接頭辞と接尾辞はあるが(いずれも1音節)、接頭辞は基本的に名詞の単複を表す

のみであり、また接尾辞も指小辞を除いて特定の意味を持たない。接頭辞は声調が L のものが多く、また接尾辞は H が普通である。従って、声調パターンは接頭辞と接尾辞を外し、語根のパターンを考えると、1 音節語根では H と L、2 音節語では HH、HL、LH、LL、H!H、3 音節語根では HHH、HLL、LHH、LLL、LH!H (HHL、HLH、LHL、LLH はなし) である。4 音節以上の語根は少なく LLLH のみである。得られたデータからは、この言語では声調のパターン数は音節数とは関係なく H、L、HL、LH、H!H の 5 タイプに分類できる。声調の機能としては、名詞の所有が声調で表現されることがある。

6.3 仲尾論文ジュバ・アラビア語 (アフロ・アジア語族セム系、南スーダン)

ジュバ・アラビア語の単語の大部分の声調パターンは、1 音節語では H と F、2 音節語で HL、LH、LF、3 音節語で HLL、LHL、HLH、LLH、LLF のように等差級数的に増える。このパターンは、単語のどこかの音節に H があるか、語末に F が現れるということで、単語の音節数を n とするとパターン数は $n+1$ で表される。これは大部分の語彙供給言語であるアラビア語スーダン方言的アクセント体系を反映したものである。しかしながら、ジュバ・アラビア語では、声調が人名形成や動詞名詞形成、受動態形成など幾つもの文法的機能持ち、これらはアクセント的性質を示さない。ジュバ・アラビア語は、濃厚な言語接触の結果、アラビア語的アクセント体系を上層とし、バンツー系やナイル系言語の声調体系を基層とする複合的体系をしていると考えられる。

6.4 若狭論文ウォライタ語 (アフロ・アジア語族オモ系、エチオピア)

ウォライタ語の普通名詞は、男性、女性の文法的性や格変化などにより様々な語尾がつく。本稿では、主として男性普通名詞の引用形である具体形単数絶対格の形を扱う (派生によらない女性普通名詞は数が少ない)。ウォライタ語は、アクセント (著者はアクセントという用語を用いる) は、いわゆる 3 型タイプである。すなわち、名詞語幹の音節数が増えても原則として型は 3 つしかない。男性普通名詞具体形単数絶対格の語尾には 3 種類あるが、3 種類とも、I: 語尾第 1 母音を含むモーラが H のもの、II: 語幹最終音節が H のもの、III: 語幹の後ろから 2 番目の音節が H のものの 3 つである。どの型を取るかは語彙的に決まっている。ただし、派生接尾辞 *-tett* を語幹内に含む場合は III 型になるなどパターンが予期できる場合もある。アクセントの文法的な機能

としては名詞主格形の具体形 vs 非具体形を区別するなどの機能はあるが、概して弱い。

6.5 梶論文テンボ語 (ニジェール・コンゴ語族バンツー系、コンゴ民主共和国)

テンボ語の声調は H と L の 2 つで、モーラ・カウンティングである。H と L とでは L を基本とする言語が多い中、テンボ語は H を基本とする。声調のパターン数は、単語のモーラ数を n とすると、概ね 2^n で表すことができる。単語は通常 2 モーラ以上であり、1 モーラ語では L の語が 1 語あるのみである。2 モーラ以上では 2 モーラ語で HH、HL、LH、LL、3 モーラ語で HHH、HHL、HLH、HLL、LHH、LHL、LLH、LLL のようにパターン数は等比級数的に増える。単語は最大 7 モーラまでであり、7 モーラ語では 3 パターンのみである。また、2 モーラ語の FH、3 モーラ語の LFL など 2^n には収まらないパターンもあり、世界的に見ても稀なパターンの多さである。声調の機能としては、呼格表示など、アフリカの言語では稀な機能がある。

6.6 梶論文ニョロ語 (ニジェール・コンゴ語族バンツー系、ウガンダ)

ニョロ語の声調パターンは、単語の長さに関わりなく、基底において終わりにから 2 音節目に H があるタイプと、最後の音節に H があるタイプの 2 つしかない。単独形では前者は、最後の 2 音節が -FL で現れ、後者は -HF で現れる。-HF というパターンは語末の H が 1 つ前の音節に予期されたものである。そして最後の音節に F として痕跡を残す。名詞の後に付加形容詞などが続いてポーズが外れると、前者は、最後の 2 音節が規定通り -HL となるが、後者は H が予期されたまま -HH となる。ニョロ語は 2 型でありながら、幾つもの声調による最小対がある。声調の機能としては、時制の区別や関係節形成などに重要な役割を果たす。

6.7 宮崎論文ニョレ語 (ニジェール・コンゴ語族バンツー系、ウガンダ)

ニョレ語は声調パターンが 4 型の言語である。すなわち、名詞は幾つかの例外を別にすれば、単独形において、1) すべて L から構成されるもの、2) LL と続き語末音節に H が来るもの、3) LL と続き語末から 2 音節目に H が来るもの、4) 全て H のものの 4 パターンである。尤も、これがすべて現れるのは 3 音節語のみである。すなわち LLL、LLH、LHL、HHH の 4 種類である。1 音

節語では L のみ、2 音節語では LL、LH、HH の 3 種類で HL は現れない。また、4 音節語では LLLL、LLHL、HHHH で、LLLH は現れない。5 音節語では LLLLL、LLLLH、HHHHH のみで、LLLHL は現れない。名詞に前接母音（著者の用語では冒頭母音）が付くと、その母音の声調は、名詞初頭の声調と逆になる（いわゆる両極化）。声調の機能としては、動詞変化形において、遠過去完了形と近過去完了形が声調のみによって区別されるということがある。

6.8 品川論文ロンボ語（ニジェール・コンゴ語族バンツー系、タンザニア）

ロンボ語は、基本声調は H と L の 2 つである。著者はこれを H と \emptyset とする。この言語には、ダウンドリフト現象に加え、ダウンステップ H も現れる。また限られた環境であるが超高 H も現れる。ロンボ語の名詞の声調パターンは、基底形と単独発音形とはかなり異なる。単独形では、1 音節語幹語では L-L（接頭辞 L には成節性なし）、L-H（接頭辞 L には成節性なし）、2 音節語幹語では L-LL（例なし）、L-LH、L-HL、L-H⁺H、H-LL、H-LH、H-HL、H-H⁺H であり、一見接頭辞を含めた単語全体で 2ⁿ のパターンで増えていくように見えるが、著者は接頭辞の H は基底にはなくポストレキシカルな H 挿入規則により導入されるとする。その他幾つかの規則を導入することによって、基底においては、例えば 2 音節語幹語では \emptyset - $\emptyset\emptyset$ 、 \emptyset - \emptyset H、 \emptyset -H \emptyset 、 \emptyset -HH の 4 つのパターンが導き出せる。声調の文法的機能としては、動詞構造の最初に現れる H が否定文や従属節と区別された肯定文の主節であることを表すことなどが挙げられる。全体として声調の揺れが観察されるが、これは声調が単純化していることを示す可能性があることが指摘されている。

6.9 安部論文マア語（ニジェール・コンゴ語族バンツー系、タンザニア）

マア語は、内マア語と外マア語の 2 種類の変種がある。内マア語にはアフロ・アジア語族のクシ系言語の単語を多く含むが、形態、統語的にはバンツー系の外マア語と変わらない。いずれも名詞は接頭辞と語幹から成り、接頭辞の声調は基本的に L である。語幹は、1 音節では L と H、2 音節では HH、HL、LH、LL という風にパターン数が等比級数的に増える。基本声調は H と L の 2 つである。ただし 3 音節語幹では HHH、HHL、HLL、LHH、LHL、LLL の 6 パターンのみで、HLH と LHH の例はない。4 音節語幹となるとさらに例は少なく、パターンは HHH、LHHL、LLHL しか見当たらない。5 音節語幹は

スワヒリ語からの借用の HHHHL のみである。声調の文法的機能としては、主語関係節が声調のみで非関係節文から区別されるということがある。

6.10 古本・高橋論文スワヒリ語マクンドウチ方言 (ニジェール・コンゴ語族バンツー系、タンザニア、ザンジバル島)

タンザニアのザンジバル島南東部に話されるスワヒリ語マクンドウチ方言について、先行研究は2音節語では LL と LH の2パターン、そして別の先行研究は、1音節語は H、2音節語は LH、HH、LLH の3パターン、そして3音節語は LHH と HLH のパターンがあるとし、ピッチが語彙的に関与的であるとされてきた。しかし音響分析を行ったところ、2音節語も3音節語もそれぞれの音節がほぼ同じ高さで発音される。これは、終わりから2音節目が他の音節より高くそして長く発音される標準スワヒリ語のストレス・アクセントとは大きく異なる。マクンドウチ方言には、声調もストレス・アクセントもない。これは他のスワヒリ語方言には見られないマクンドウチ方言独自の特徴である。

6.11 阿部論文ベンデ語 (ニジェール・コンゴ語族バンツー系、タンザニア)

ベンデ語は、F と R も現れるが、基本声調は H と L の2つであり、名詞の声調のパターンは3型である。すなわち単独形で言うと、1) 接頭辞も含めすべて H で現れるもの (4音節語幹語で H-HHHH)、2) 接頭辞が H で語幹初頭が L、そしてそのあと H が現れ L と続くもの (4音節語幹語: H-LHHL)、3) 単語の終わりから2音節目が H となるもの (4音節語幹語: L-LLHL) である。これらの声調は、名詞の現れる環境によって変化する。例えば、1) のタイプの名詞は、L 声調の コピュラ ni 「～である」に導入された述語名詞となると、名詞初頭の2音節のみが H となりあとは L となる (L#H-LHLL)。ただし、接頭辞が母音や鼻音だと特殊な規則が必要になる場合がある。興味深いのは第3のタイプである。このタイプはコピュラ ni の後では接頭辞が H となるのである (L#H-LLHL)。このタイプにはスワヒリ語からの借用語が多く含まれる。

6.12 米田論文ヘレロ語 (ニジェール・コンゴ語族バンツー系、ナミビア・ボツアナ・アンゴラ)

ヘレロ語の名詞の声調のパターン数は、名詞語幹の音節数に従って等比級

数的に増える（高と低の2声調の2を底とし名詞語幹の音節数を n とすると 2^n で表示）。また、名詞の前接辞（著者の用語では冒頭母音）と接頭辞（著者の用語では名詞クラス接頭辞）の声調は基本的にどちらも L であるが、名詞が文中で果たす文法機能によって接頭辞の声調は変化する。すなわち声調による一種の格表示 (tone case) があるということである。これはバンツ系の中でも特異的である。その際、前接辞と接頭辞はまとまって行動することから、前接辞と接頭辞の両者を併せて名詞接頭辞とする。名詞接頭辞の声調には LL 、 LH 、 HL の3つのパターンがあり、 LL は基本形、 LH は補完形、 HL は提示形を表す。

6.13 Lee 論文ツォンガ語 (ニジェール・コンゴ語族バンツ系、南アフリカ・モザンビーク・ジンバブエ)

ツォンガ語は、基本声調は H と L の2つである（著者の表示では H と \emptyset ）。名詞接頭辞はすべて L である。語幹の声調のパターンは1音節では2通り、2音節では4通りという風に 2^n で進むが、3音節語幹では可能な8通りのパターンの内あるのは6通りで HLL と LLH の例は見えない。ツォンガ語の声調規則として特異的なものに、 H の右への拡張がある。 $\beta\acute{a}\beta\acute{a}\beta\acute{a}\beta\acute{a}:\acute{m}a > \beta\acute{a}\beta\acute{a}\beta\acute{a}\beta\acute{a}:\acute{m}a$ 「彼らは肉を買う」で、 H を持っているのは主語接辞の $\beta\acute{a}$ 「彼ら」のみであり、その H が、 H を持たない動詞語幹のみならず、あとに続く目的語にまでも及ぶのである（ただし終わりから2音節目まで）。また声調の拡張を阻止する、いわゆる降圧子音 (depressor consonant) が見られるのもツォンガ語を含む南部アフリカのバンツ諸語の特徴である。声調の文法的機能としては、2人称単数の主語接辞 u -「あなた」と3人称単数の主語接辞 \acute{u} -「彼(女)」とが声調によって区別されるということがある。

7. 終わりに

以上、本書に収められた各論文に示されたデータを中心にアフリカ諸語の声調・アクセントの特徴について述べてきた。最初にも述べたように、本書はこの種の最初の論文集であり、アフリカ諸語の声調・アクセントに関しては、まだまだ触れられていない事象も多い。アフリカには言語が多く多様であるということもあるが、多くの言語で文法が極めて複雑で、しかも例えば動詞変化では、声調が形態論的な部分だけでなく、統語構造や情報構造と密接に係わ

っていることが多々ある⁴¹。ただし、本書で対象としたのは、主として名詞類であり、動詞は説明の都合上触れることはあっても、主たる対象ではない。

アフリカの言語は奥深く、1つの言語についてでもその全体像を描き出すのは至難の業である。本書の著者の中には言語の全体像を描き出すことを目的としつつも、声調の問題だけを取り出して考察するのは初めてという人もいる。しかしながら、ここにこうして様々な言語の事例が示せたわけであるから、これらを土台にさらに研究を進めていくことが可能となると考える。

参考文献

- Greenberg, Joseph Harold (1963) *Languages of Africa*. Bloomington: Indiana University.
- 梶茂樹 (2006) 「ハヤ語、アンコーレ語およびトーロ語の声調の比較、特にトーロ語の声調消失に関連して」『言語研究』129: 161-180.
- Kaji, Shigeki (2009) “Tone and syntax in Rutooro, a toneless Bantu language of western Uganda” *Language Sciences* 31(2-3): 239-247.

⁴¹ 例えば今私がまとめているウガンダのニョロ語の動詞の活用形であるが、変化のパターンを示そうとすると A4 打ち出しで 300 ページ以上となる。そのほとんどは声調の変化に係わる部分である。